

長崎原爆被爆者の介護 20 日間

山本榮一

私は千葉県東金市で出生。

昭和 10 年、父が旧満州国の海上警察勤務となったので旧関東州の旅順市に移住し、昭和 10 年 4 月より 7 年間在住し、昭和 17 年 4 月に旧北支 山東省青島市に移住し、青島日本人中学校 4 年生の 10 月に海軍甲種飛行予科練習生の募集で志願をしました。

当時 15 歳で身長 150cm、体重 50kg で合格ラインギリギリでしたが、10 月下旬に合格通知がありました。

父が国旗に入隊祝の寄せ書きを大勢の方々に書いて頂き、祝って頂きました。

昭和 19 年 11 月 13 日、入隊祈願で青島神社に参拝後、青島駅までの 3km を市中行進で大勢の方々に見送られて駅を出発して、奉天→平壤→京城→釜山より下関で 1 泊し、青島からの入隊者 25 名で山口県防府海軍通信学校甲飛練に入隊しました。

6 ヶ月間の教育訓練を終了し、昭和 20 年 5 月、九州の長崎県針尾海兵団に移駐して次の命令を待つため、待機中に足に吹出物ができたので医務室で診断を受けた結果、医官より「君達は近々特攻要員に成るのだから温泉で療養しなさい」との指示で、8 月 1 日より 10 日までの 10 日間、佐賀県嬉野の海軍病院に入院を命ぜられました。

入院は 1 日 3 食頂き、入浴は 4・5 回、その他のんびりと卓球・将棋・読書で何の不自由もない生活。現在日本は戦時中なのにこんな生活で良いのかと思いながらの生活でした。

10 日間の入院生活も終りが近づき、8 月 9 日、明日は退院で、現隊復帰の準備中の夕方、急に院長より「退院中止、現場に待機せよ」との命令が来ました。何が有ったのか全く不明でしたが、翌 8 月 10 日の朝、長崎市に 9 日の昼頃新型爆弾が投下され、その患者が来院するとの事で、受入態勢で班の編成をすることに成りました。

医官 2 名、看護婦 2 名、衛生兵 2 名、その他入院者 4 名の 10 名で 1 ヶ班を編成し、病院 2 階個室 (6 人部屋) 4 室と 80 名の大部屋に患者を収容するとの事。こんなに大勢来るのかと不安でしたが、私達だけではなく他に 3 ヶ班有りました。

次にどんな指示が来るのかと心配な気持ちで待機していました。

8 月 10 日の夕方、トラックが病院内の道路に何台も駐車していました。

指示が有り、君達は駐車中の車中より患者を 2 階の病室に移送せよとの事で、2 名 1 組で担架を持って、車両後尾のシートを開くと中からひどい悪臭がし、何だこれかと思いながらも手拭で口を覆い車両内に入り、患者を担架に乗せようと、背中に手を廻して持ち上げるとズルーと手が滑りました。其の時、患者が大声で「キャー」と悲鳴をあげました。

どうしましたかと聞くと大火傷とのこと。「申し訳ありません」と謝り、下の毛布と共に担架に乗せて病室の寝台まで無事に運び入れました。

其の後、同じ様な患者を何回か車と病室を往復した事か、此の中には爆風で怪我をされた患者は1人で病室まで歩く人も居ました。

終りが近づいた頃には東の空が明るく成って来ました。

病室の小部屋4室で24名は子供と女性と軽い火傷と怪我した4名の付添者の方々です。

大部屋も80名で満室に成り、患者は火傷と怪我をした方々に分かれていますが、この人々を私達が治療助手と介護をしなければ成りませんでした。

1ヶ班10名で104名の世話をすることに成りますが、交代の予備人員もなく重病者ばかりで、気が遠く成る思いでしたが、介護をしなければ成りません。

全員で覚悟を決め、治療と介護を昼夜にわたり力を合わせて任務にまい進しようと誓い合いました。

被爆で火傷した患者は「痛い痛い、水をくれ」と騒がれ、「早くなんとかして下さい」とせがまれるが、医官以外の私達には何もできませんでした。

爆風で飛ばされて傷を受けた患者も同様に「痛い痛い」と騒ぐ病室内は想像以上の騒がしさでした。

治療には何という薬名か忘れましたが、黄色の粉薬しか無く、傷口に粉薬を付けてガーゼで覆い、その上に油紙を付けて包帯をするだけでした。1日2回取り替えるのですが、ガーゼを剥がす時に痛いので「ガーゼを付けないでくれ」と文句を言う患者も多く居ましたが、医官からの一喝「駄目」の一言で結論が出ましたが、患者がかawaiiそうなので、何とか協力しようと以後はガーゼを取り替える時は時間をかけてなるべく痛く無い様にしました。時間がかかり大変でしたが、患者の身に成り努力しました。

火傷の患者には医官と看護婦が直接治療をしているので、私達には手が出せませんが、火傷で重病の患者には酸素吸入を行っていますが、吸入器も不十分で10ヶ位しか有りませんでした。

私が指先に火傷をしただけでも痛くてたまらないのに、全身大火傷ではどんなに痛く辛く苦しかったことか想像が出来ません。

そんな時に医官から「山本飛長、6号ベッドの酸素吸入器を13号ベッドに移動せよ」との指示で「ゴメンネ」と言って吸入器を移動しますが、吸入器を取られた方は何とみじめな事か。

この方は、私達が最初にトラックから病室まで運んだ患者さんでしたので、すぐベッドに行き「如何ですか」と聞くと「兵隊さん、水を下さい」と言はれたので吸呑みで水を飲ませると、にっこりと笑顔で「アリガトウ」が最後の言葉に成りました。私は涙が止まりませんでした。

此んな様子が何回も繰り返され、涙涙でした。亡くなられた方々を受け取りに来られた衛生兵に、運び出す度に御冥福を祈り、手を合わせ涙で見送りさせて頂きました。

今後又どこかの市に新型爆弾が落下されるのでは無いかと思うと恐ろしく、また大変なことに成るのではないかと心配でした。

8月15日、天皇陛下の放送が有るので聞く様にとの指示が有りましたが、放送内容は現在沖縄戦の最中、全国民が一致団結し困難に当たれとの事だろうと勝手に理解しましたが、私達には大勢の患者がいる看護に夢中でした。

放送を聞いた方々が帰って来て涙を浮かべ、日本が戦争に敗けた事を聞きました。私は「何に敗けた」と思い、一番に頭に浮かんだことは「あゝ、死ななくても良いのだ。又両親や兄弟と逢える」と同時に「今後は新型爆弾の投下も無く成る」と安堵の気持ちに成りましたが、もう少し敗戦が早ければ、現在の様な私達が介護している患者も出なかったと思いながら介護に精励しました。

爆風の患者も、10日も過ぎれば徐々に傷も快復し、私の父親位の方と気が合い、仲良く成り、食事の運搬や配膳等も手伝って頂く様に成りました。

此の方は、会社の工場長で、入社する女性の面接中に爆風で飛ばされ、何時間過ぎたか不明で気が付いた時は面接室より10m位飛ばされていたそうです。面接の女性は那场より5m先で亡くなられたそうです。

自分の怪我も忘れて周辺を見ると一面の焼け野原で、付近には人影もなく、そのうちに気が遠く成ったそうです。目が覚めた時は天幕内のベッド上で、傷は背中中央部分が15cm位割れて肉が盛り上がっていたそうです。

夕方には嬉野海軍病院にトラックで搬送されました。

8月10日入院した方々で個室に入室した女性と子供と付添の24名は、20名が亡くなり、付添の4名の方々は元気になり、私達の手伝いをして頂きました。

大部屋80名中、爆風で怪我をされた方々は大勢が快復に向かっていますが、火傷の方々の快復は少ない様でした。細部は不明です。

私達4名は8月31日で介護勤務を終了し、9月1日付で復員命令を受領し、私は千葉県へと帰路に付きますが、退院で玄関に出たら、元気に成った患者の方々に見送られ、涙で帰途に付きました。

途中、広島駅に約 1 時間の停車をしましたので、プラットホームだけの駅で見て驚く事ばかり。機関車が線路から飛ばされて横倒れになったまま、その横には線路がしU型に曲って放置されている始末。ホームから広島市内方面を見れば一面の焼け野原で、道路だけ分かるが何本かの電柱が残っているだけ、又蔵も何軒か残っている位でした。長崎市内もこれと同じ風景ではないかと想像しました。

東京に着きました。子供の頃より母から「千葉に行くには秋葉原駅で乗り換えるのだ」と聞かされていたので、その秋葉原駅で乗り換えて千葉に向かいました。

千葉県に入る時、江戸川の鉄橋の橋脚に横断幕があり、「復員の皆様御苦勞様でした」の幕を見て、2 度と帰る事が出来ないと思っていた千葉に入る時が来たと、目頭が熱く成ったのを覚えています。

終戦がもう少し続いていたら、私も海軍飛行兵です。特攻隊員で乗る飛行機も無く成ったので、人間魚雷（回天）で出撃していた事でしょう。

原爆被爆者を昼夜の治療と看護で大変でしたが、それより被爆された方々はどれだけ苦しみと痛みに悩まされた事か。

原爆の使用は絶対に禁止すべきです。いや、原爆を保有することを禁止すべきです。

原爆は長崎と広島が最後です。

長崎・広島での原爆被爆者の御冥福をお祈り申し上げます。

私は佐賀県嬉野の旧海軍病院内で、原爆被爆者の治療看護の 20 日間は一生忘れることの出来ない思い出です。

終